OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「原道」成立考
Author(s)	鵜飼, 尚代
Citation	待兼山論叢. 哲学篇. 1982, 16, p. 19-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/5631
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

「原道」成立考

鵜飼尚代

一　はじめに

中国儒教史の流れは、宋代に入ると、古代への回帰を標榜しながらその実人間存在をその内面から規定してゆくという新たな方向を採って進む。そこに中国のルネサンスを観ることは可能だろう。がルネサンスは突然花開いたのではなく、萌芽はすでに唐代に見えるのである。

韓愈は柳宗元と共に、唐代古文運動の頂点に位置する文学者であり思想家である。ここで採りあげる「原道」は、その韓愈の代表的論文であって、宋学の完成者朱子やその師程伊川がしばしば議題とし、また理論展開の際引用した[1]著作である。宋学の問題意識の中で捉えられるべき点を多くはらんでいると考えられよう。この意味で韓愈の「原道」にルネサンスの萌芽をみる、つまりそれを宋学の先駆とすることができる。

具体的に宋学の先駆とされる特徴的な点のみ挙げるならば、微視的には道統理念・「大學」の重視が挙げられようし、巨視的には釈老を排斥して儒教を宣揚せんとする「原道」執筆の意図そのものが挙げられよう。

私が小論で扱いたいのは主に後者の特徴に関する問題である。韓愈が推進させた古文運動では単に文体において

のみ古代の復興が叫ばれたのではなく、その文体にのせる思想が古代を継承すること、すなわち漢代以前の儒教に回帰することを目的とした。「原道」で追求され宣揚された〈道〉も無論二帝三王の道であった。しかし「原道」では釈老批判を軸に論が展開される。釈老批判、特に釈――仏教――に対する批判そのものは、宋学の先駆とされるものの決して独自の視点に立つものではなく、六朝以来の仏教批判を踏襲したにすぎない。とはいえ韓愈にとって釈老批判が重大な意味を持ったことは窺える。そこで小論では、なぜ釈老批判を軸とするのかという問題も含め、「原道」成立の動機づけを試みてゆきたい。成立に遡って考察することにより、韓愈が「原道」にこめた思いを確認すると同時に、唐代思想史にしめる韓愈の位置づけもより精しいものになろうと考えるのである。

二　「原道」の成立時期

成立に関する考察の最初はやはり時期の決定であろう。あいにく韓愈自身の著作の中にも、また同時期の作家の著作の中にも、「原道」の成立に直接触れているものは見当たらない。そこでアプローチの方法として、「原道」に盛りこまれた思想の形成やその表現のし方に注目し他の著作と比較検討してゆきたい。

さて韓愈に「送浮屠文暢師序」なる序文がある。各地を周遊してはその地の有識者に詩を請うている文暢という仏師に贈ったもので、柳宗元を通して詩を依頼されている。この序中、韓愈は文暢に対して仏教の説をではなく、〈聖人の道〉をこそ語るべきだという。そして〈聖人の道〉の由来を以下のように述べる。

(A)民の初めて生まれしとき、固(もと)より禽獣夷狄の若(ごと)く然り。(B)聖人なる者立ち、然る后(のち)(C)宮居して粒食し、(D)親を親しみて尊を尊び、(E)生者は養いて死者は蔵(おさ)むるを知れり。是の故に(F)道、仁義より大なるは莫(な)く、(G)教え禮樂刑政より正

しきは莫し。(H)これを天下に施さば、萬物その宜しきを得、(I)これをその躬に措かば、體安んじて氣平らか。(J)堯是れを以てこれを舜に傳え、舜是れを以てこれを禹に傳え、禹是れを以てこれを湯に傳え、湯是れを以てこれを文武に傳え、文武是れを以てこれを周公孔子に傳う。(K)これを冊に書せば、中國の人世々これを守る。

この記述と、「原道」の要約部分の記述、

夫れ所謂る先王の教えとは何ぞや。(F)?博く愛するこれを仁と謂い、行いてこれを宜しくするこれを義と謂う、是れに由りて之くこれを道と謂い、己に足りて外に待つこと無きこれを德と謂う。(G)その文は詩書易春秋、その法は禮樂刑政、その民は士農工賈、(D)その位は君臣父子師友賓主昆弟夫婦、(C)その居は宮室、その食は粟米果蔬魚肉。その道爲るは明らかにし易く、而もその教え爲るは行い易きなり。是の故に(I)これを以て己を爲むれば、則ち順にして祥、(H)これを以て人を爲むれば、則ち愛ありて公、(I)これを以て心を爲むれば、則ち和にして平、(H)これを以て天下國家を爲むれば、處して當らざる所無し。是の故に(E)生まれては則ちその情を得、死しては則ちその常を盡くす、郊にして天神假り、廟にして人鬼饗す。曰く「斯の道や何の道ぞや」と。曰く「斯れ吾が所謂る道なり。向の所謂る老と佛との道に非ざるなり。(J)堯是れを以てこれを舜に傳え、舜是れを以てこれを禹に傳え、禹是れを以てこれを湯に傳え、湯是れを以て文武周公に傳え、文武周公これを孔子に傳え、孔子これを孟軻に傳え、軻の死するや、その傳うるを得ず。荀と揚とや、擇びて精ならず、語りて詳ならず。周公由りて上、(K)上にして君爲り、故にその事行なわれ、周公由りて下、下にして臣爲り、故にその説長し」と。

とを比較し意味内容の近いものをアルファベットの記号で対応させると、論の組み立て上順序に異動があるものの、CEF(?)GHIJKが意味として対応するだけでなく、表現もかなり似ていることがわかる。

A′B′C′D′E′については、「原道」の

古の時、人の害多し。聖人なる者有りて立つ、然る後これに教うるに相い生養するの道を以てす。

(A)　(B)　(C)(D)(E)

の部分が、またF′については、

凡そ吾が所謂る道徳と云えるは、仁と義とを合わせてこれを言うなり、天下の公言なり。

がより適切に対応する。また「送浮屠文暢師序」で道統が孔子までしか記されないのは、仏師が読み手だからであろう。

それにしても「送浮屠文暢師序」の記述は「原道」の要約部分に内容・表現がかなり近い。従って前者は後者をさらにコンパクトに表現したと考えることができる。

「送浮屠文暢師序」が仏教を排斥して儒教の〈道〉を説こうとした点、そして〈道〉に関する記述の内容・表現とも「原道」の要約部分に近似している点から、「原道」は「送浮屠文暢師序」が執筆された時までに完成していたと考えられるのではなかろうか。

では、「送浮屠文暢師序」はいつ頃執筆されたか。序中に、

貞元十九年春、将に東南に行かんとし、柳君宗元これが為めに請う。

との記述があり、貞元十九年（803）の春ごろ執筆されたと思われる。

またその三年後、元和元年（806）に書かれた詩「送文暢師北游」には、

昔、四門館に在りしとき、晨に僧來りて謁すること有り。

の句があり、文暢と初めて会った時、韓愈は四門博士の職に就いていたことがわかる。

そこで「原道」は「送浮屠文暢師序」が執筆された貞元十九年、韓愈が三十六歳で四門博士の職にあった時までに成立したと考えるのである。

ところで韓愈の書簡中に「重答張籍書」がある。これの執筆時期を明確にすることはできないが、すでに三十歳を過ぎ幕僚から中央官僚へ移ることを願っていた頃、韓愈三十一～二歳の書簡[2]と思われる。その中で、

今、夫の二氏の宗としてこれに事うる所の者、下は乃ち公卿輔相、吾れ豈に敢えて昌言してこれを排さんや。その語るべき者を擇びてこれに誨うるも、猶お時と吾れと悖れば、その聲嘵嘵ならん。もし遂にその書を成さば、則ち見てこれを怒る者必ず多し、必ず且に我を以て狂と爲し惑と爲せば、その身の恤むあたわざらんとす。書の吾れに於ける何か有らん。

といい、韓愈は釈老批判を著述するよう勧める張籍に、今はその気がないと返事をしている。

この事から「原道」の執筆時期を三十一～二歳まで下げることはできない。従って「原道」は韓愈が三十代の半ば頃、しかし遅くとも三十六歳までに成立したと考えるのである[3]。

三 「原道」成立の背景

「原道」のおおよその成立時期がわかったところで、その頃の韓愈がいかなる状況にあったかを考えてみたい。

まず当時韓愈が就任した官職を略述すると、貞元十二年（796）二十九歳の秋から同十五年（799）三十二歳の春までは汴州の宣武軍節度使の幕僚に、その年の秋から翌十六年（800）三十三歳の夏まで徐州の武寧軍節度使の幕僚に就任していたが、十七年（801）三十四歳の暮、四門博士に任命され、十九年（803）三十六歳には監察御

史となっている。長い浪人生活から脱却して節度使の幕下に納まり、生活はいちおう安定するが中央への思いはやまず、しかもその安定した生活さえ長く続かない。それでも三十四歳にはようやく中央に官を得たのだった。

この時期に韓愈の身辺に起きた重要な出来事は、韓愈をとりまく集団――韓門――が形成されつつあったこと、そして柳宗元との交流ができたことであろう。

韓門を代表する人物には李翺（?–844?）・張籍（765?–830）・皇甫湜（777–?）・盧仝（生没年不明）・賈島（788–843）・劉叉（生没年不明）等があり、友人という立場だが孟郊（751–814）も含まれるであろう。

「原道」が執筆された頃、韓愈は孟郊に「與孟東野書」や文学論を展開して有名な「送孟東野序」を送っており、また「與馮宿論文書」で李翺・張籍がかれについて文章を学んでいることに触れている。(4)

このように韓門が形成されつつあり、しかも後世に名を残す実力者たちがすでにそれに加わっていたことによって、韓愈は集団のリーダーとしての自覚を促されることになったのではなかろうか。

前の「與馮宿論文書」は自作の文章の評価を求めてきた馮宿という人物への書簡だが、その中で韓愈は、自分の文章は世間で高く評価されなくはないが、それは自分の思いとは全く逆であり、古文に則って書いた自信作が認められない、〈知らず古文直ちに何ぞ今の世に用いらるるや。然らば以て知者の知るを俟つのみ〉と述べ、古文が世間で認められなくとも追求してゆく姿勢を表明している。もはや古文を好しとする嗜好の域を脱し、一つの立場の自覚が窺えるのである。

韓門の形成により古文は主義として練られていったと思われるが、その傾向をさらに助長する働きをしたのが柳宗元との交流だったであろう。

韓愈が柳宗元と出会った時期については羅聯添氏に研究があり[5]、貞元十五～六年頃としておられる。当時徐州の幕僚だった韓愈は、貞元十五年の暮、武寧軍節度使張建封の命を受けて長安に上り、翌十六年徐州にもどっている。この時、集賢殿正字という出世職に就き〈儁傑廉悍にして、議論、今古を證據とし、經史百子に出入す。踔厲風發にして、率ね常にその座の人を屈せば、名聲大いに振い、一時皆慕いてこれと交わらんとす〉（韓愈「柳子厚墓誌銘」）るほど時めいていた柳宗元に接近したと推測される。

貞元十五～六年に始まった両者の交流がいかなるものであったかを、両者の著作や書簡から直接知ることはできない。しかし柳宗元の「讀韓愈所著毛穎傳後題」「與韓愈論史官書」によって、柳宗元の韓愈に対するかかわり方を憶測することはできよう。

「讀韓愈所著毛穎傳後題」では、韓愈が「毛穎傳」で試みた物の擬人化を、否定的に見る方が世間の大勢であるにもかかわらず、『詩』『史記』にも採用された方法としてもちあげ、また毛筆の伝記を書いたこと自体高く評価する[6]。逆に「與韓愈論史官書」では、韓愈が比部郎中兼史館修撰に任じられ、国史編纂という重要な任務に就きながら、古来歴史家は刑禍を受けて不幸になったとして消極的な姿勢をとっているのを、厳しく批判して官を去れとまで言っている[7]。

柳宗元には自らの思想・立場を貫き通そうとする純粋性・一貫性があったらしく、その姿勢で韓愈にも対していたことが推察できる。

一方、韓愈が柳宗元にどのように対していたかは、「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士」に窺える。これは、貞元十九年四門博士から監察御史に転任したのも束の間、陽山県の県令に左遷された時

詠ったものだが、その中で韓愈は、監察御史時代の同僚柳宗元や、韓愈と入れ替わるようにして監察御史となった劉禹錫（772–842）に対して、自分の発言を上部に密告したのではないかとの疑念を表わしている。(8)

ここから韓愈が柳宗元に対して胸襟を開き、両者の間で盛んに議論が闘わされていたことが推測できよう。

以上のごとく、韓愈は純粋に自らの思想・立場を追求する柳宗元――特に「原道」が執筆された頃は挫折を知らない順境の中にあった――と深い議論を交えることにより、その思想が陶汰されていったのではないかと考えるのである。

四　「原道」成立の意味

「原道」は、韓門の形成によって古文を主義にまで練りあげたことや、柳宗元との議論の交換による思想的陶汰を背景に、貞元十九年頃までには成立したと考えられる。では「原道」の執筆が韓愈にとっていかなる意味をもっていたのだろうか。このことを当時の韓愈の意図として考察してゆきたい。

その意図とは

(a)思想の体系化の意図
(b)思想の純化の意図

である。

(a)　思想の体系化の意図

前に「原道」の成立時期を考察した際引用した「送浮屠文暢師序」には、儒者が仏教徒に対して述べるべき原理

を列挙して、次のようにいう。

吾が徒の如きは、宜しく當にこれに告ぐるに二帝三王の道・日月星辰の行・天地の著なる所以・鬼神の幽なる所以・人物の蕃する所以・江河の流るる所以を以てしてこれに語ぐべし。當に又浮屠の説を爲してこれをするべからざるなり。

この序文を書いた頃、韓愈は儒教の世界観に則り、〈二帝三王の道〉から〈江河の流るる所以〉に至る原理を述べることによって、儒教は正確に伝わり仏教に比しての優位も理解されると考えていたらしい。ところでその一々の原理だが、ほとんどがいわゆる五原――「原道」「原性」「原毀」「原人」「原鬼」をいう――で扱われている命題にかかわることに気づく。

〈二帝三王の道〉が「原道」で詳述され、道統として跡づけられていることに証明の必要はなかろう。

〈日月星辰の行〉については「原人」で

。上に形わるる者これを天と謂う。……（中略）……日月星辰、皆天なり。

。天道亂れて、日月星辰その行を得ず。

。天は日月星辰の主なり。

と述べ、〈天〉と〈日月星辰〉との関係に対応させて、〈人〉と〈夷狄禽獣〉との関係、さらには〈人〉のあり方を論じている。

〈天地の著なる所以〉とは、やはり「原人」で、

天は日月星辰の主なり、地は草木山川の主なり。

と規定していることにかかわってこよう。

〈鬼神の幽なる所以〉は、「原鬼」で〈鬼〉と〈物怪〉とを区別し、〈鬼〉について、

漠然として形と聲と無きは、鬼の常なり。民、天に忤うこと有り、民に違うこと有り、物に爽い倫に逆うこと有りて、氣に感ず、是こに於いてか鬼、形に形わるること有り、聲に憑くこと有り、以てこれに應じて殃禍を下す。

と述べ、人の行為の悪に対して禍殃を下す神秘的な力を認めることをいうのであろう。

〈人物の蕃する所以〉は「原道」で説かれている〈聖人〉の功績を指すと思われる。(9)

〈江河の流るる所以〉は「原人」の

。下に形わるる者これを地と謂う。……（中略）……草木山川、皆地なり。

。地道亂れて、草木山川その平を得ず。

。地は草木山川の主なり。

にかかわる原理であろう。

このように韓愈は儒教の真価を伝える方法としてその原理を体系的に論述せんと考えており、この考えの下に五原を執筆したのではなかろうか。

ただし、少なくとも「原道」は貞元十九年までに成立していたであろうが、他の四篇が成立していたとは考えられない。なぜなら儒教の原理として列挙した一々が他の四篇のメインテーマに一致する訳ではなく、また五原中の「原性」「原毀」のテーマには触れられていないからである。だが「原道」を執筆した韓愈が、体系的に儒教を説

く必要を感じ、ひき続いて五原の他の四篇あるいはもっと多くの篇の執筆を意図していたとは考えられよう。

(b) 思想の純化の意図

はじめに触れたように「原道」は釈老批判を軸に論が展開されるが、それはどのような思想状況の把握が韓愈にあったからであろうか。

「原道」では、周が衰えて以来二帝三王の道は受難時代に入り、漢に黄老が、晋魏梁隋の間に仏教が勃興してからの状況を二つに分析する。

その一は、〈道徳仁義を言う者〉が〈老に入らざれば、則ち佛に入り〉儒教から釈老に転向すると〈入る者をばこれに附き、出づる者をばこれを汙とす〉る、つまり儒教から釈老に転向して儒教を卑下する者が多いという状況である。

その二は、いちおう儒者でありながら、釈老の側から出された〈孔子は吾が師の弟子なり〉との虚偽を安易に受け入れ、〈惟だにこれをその口に擧ぐるのみならず、又これをその書に筆す〉る、つまり儒者が釈老と結びつきやすく、しかもその結びつきに確信を抱いている状況である。

後者については「送浮屠文暢師序」の冒頭でも

人固より儒名にして墨行する者有り、その名を問わば則ち是なるも、その行いを校さば則ち非なり。

と儒者を名のりながら墨家（この場合釈家をさす）の行動規範に従う輩を非難する。

儒者が儒教を捨てて釈老に走るのみならず、儒教が釈老の思想を安易に採りこむ状況があるため、韓愈は「原道」で〈噫、後の人、仁義道徳の説を聞かんと欲すと雖も、それ孰れに従りてこれを求めん〉と思想の危機を嘆くので

ある。

この危機状況を儒教の純化、すなわち儒教の原型に立ち返ることによって乗り越えようとしたのが、「原道」や「原道」を含む五原での試みだったと考えられる。「原性」で、

曰く「今の性を言う者、此れに異なるは何ぞや」と。曰く「今の言う者、佛老を雑えて言うなり。佛老を雑えて言うは、奚ぞ言いて異ならざらん」と。

と、仏老を排斥し純粋に儒教に基づいて論を展開したことを表明しているのも証拠となろう。

さて古文運動で純粋に儒教に基づくとは、漢代以前の儒教思想に立ち返ることであった。しかし韓愈においては漢代以前の儒教についても純化が志向される。

韓愈三十四歳頃の書簡「答李翊書」の中で、

抑そも又難き者有り、愈の爲むる所、自らその至れるや猶お未だしやを知らざるなり。然りと雖もこれを學ぶこと二十餘年、始めは三代兩漢の書に非ざれば敢えて觀ず、聖人の志に非ざれば敢えて存せず、處りて忘るが若く、行きて遺るが若し、儼乎としてそれ思うが若く、茫乎としてそれ迷うが若し。……（中略）……是くの如きは亦年有るも、猶お改めず。然る後古書の正僞と、正と雖も至らざる者と、昭昭然として白黑分るを識る、而らば務めてこれを去れば、乃ち徐ろに得ること有るなり。……（中略）……是くの如きは亦年有り。然る後浩乎としてそれ沛然、吾れ又その雜を懼るるなり。迎えてこれを距み、平心にしてこれを察するに、それ皆醇なり。然る後肆にす。

という。皇甫湜の「韓文公墓銘」によると、韓愈は七歳ですでに学を好んだということだが、学の始めからいわゆ

る古文の世界に浸っていたらしい。そして学問は三つの段階を経て進み、三十四歳頃の韓愈はやっと自分なりの境地に達し、古書に盛りこまれた思想の正偽が判然と区別できるのは勿論、もはや自らの思想も純粋なあるいは理想的なものだと自負する。そこに自らの思想陶汰を自覚し、思想の純化を願う姿勢が窺えるのである。

ではこの傾向が「原道」にいかに反映されているか。

> 堯是れを以てこれを舜に傳え……（中略）……孔子これを孟軻に傳え、軻の死するやその傳うるを得ず。荀と揚とや、擇びて精ならず、語りて詳ならず。

孟子の死後、二帝三王の道を正確に伝える人物はいない。荀子や揚雄では思想の選択や表現力に不足があるとする。古文を主張して儒教の原型を追求する韓愈が孔子に立ち返ろうとするのは当然の姿勢として、孔子以後の儒教の正統を孟子で留めるところに、かれ独自の思想の純化の意図を見るのである。

『孟子』については「讀荀」で

> 始め吾れ孟軻の書を讀み、然る後孔子の道尊く、聖人の道行い易し、王は王たり易くして霸は霸たり易きを知るなり。

と述べて、儒教の理解に不可欠の書と評価しているし、「送王秀才序」では、

> 孟軻、子思を師とす、子思の學は蓋し曾子に出づ。孔子没してより、羣弟子、書有らざること莫きも、獨り孟軻氏の傳のみ、その宗を得たり。

と、孔子・曾子・子思・孟子の流れを正統とすることが述べられる。「原道」で「大學」が重視されるのも子思の著という認識があるからだろう。

孟子は醇乎として醇なる者なり、荀と揚とは、大醇にして小疵。

と「讀荀」はしめくくられるが、この評価は「原道」と一致する。

〈大醇〉であるのは、揚雄の場合、孟子を顕彰せんとする立場が認められ、〈雄の書に因りて孟氏益〻尊ければ、則ち雄なる者も亦聖人の徒か〉（「讀荀」）と評価されたことにより、荀子の場合、〈その辭を考うるに、時に粹ならざるが若きも、その歸を要するに、孔子と異なる者鮮し。抑そも猶お軻・雄の間に在るがごときか〉（「讀荀」）と位置づけられたことによる。「原道」で孟子の後に荀子・揚雄の名が挙げられるのもこの評価に基づくであろう。

荀子の〈疵〉については別に「送王秀才序」で、

荀卿の書、聖人を語るに必ず「孔子・子弓」と曰うも、子弓の事業傳わらず、惟だ太史公の書弟子傳に姓名字有りて曰く、「駏臂子弓。子弓は易を商瞿に受く」と。

と分析し、事跡のよくわからない子弓という人物をもちあげる荀子と、正統派を継承する孟子とを、孔子学派でも流れを異にするとみなしている。

揚雄については『舊唐書』韓愈伝に、

大曆・貞元の間、文字多く古學を尚び、揚雄・董仲舒の述作に效う。

と記載されているように、韓愈以前の古文運動では文体の模範とされたらしい。それを韓愈は「原道」で、思想の選択や表現力に不足すると評価を下すのであるから、それまでの古文運動とは別の角度から揚雄をみていると考えられる。

「原道」は儒教を体系的に論述せんとする意図の下に五原の一として成立した。そしてその内容や論の組み立て

から、釈老を排斥するだけでなく、釈老を安易に採り入れている儒教を思想的に純化せんとして、儒教の原型を追求したことが窺える。さらに思想的純化を追求する過程は古文運動の志向する漢以前の儒家評価にも及ぼされ、二帝三王の道を正しく伝えるのは孟子までとする道統理念が固まったと考えるのである。

五　結語

「原道」は韓愈が三十代の半ば頃、しかし遅くとも三十六歳までに成立したと考えられる。当時韓愈の身辺では韓門が形成されつつあり、集団のリーダーとして古文を主義として標榜するようになっている。またその頃には柳宗元との交流も始まり、かれとの意見交換によって韓愈の思想は陶汰されていったと思われる。

このように思想を育む場を背景にして「原道」は成立するが、韓愈はどのような意図をもってそれを執筆したのであろう。韓愈が眼前にしているのは、釈老が思想界を風靡し、儒家までが安易に釈老思想を採り入れるという儒教の危機である。これに対して韓愈は、思想の体系化や純化によって危機を乗り越えようとした。そこで「原道」のみならず五原が執筆され、またその中で儒教の原型が追求されたのである。

さらに注目すべきは、思想純化の過程が、それまでの古文運動で志向された漢代以前の思想にも推し及ぼされている点である。具体的に「原道」では二帝三王の道を正確に伝えるのは孟子までとし、荀子や揚雄では不充分とする。しかし特に揚雄などはそれまでの古文運動で文体の模範とされているのである。ここから「原道」が従来の古文運動とは別の視点から執筆された、すなわち古文運動の思想的側面をより精緻にせんとして執筆されたことが窺える。古文運動には純粋に思想運動として展開する可能性があったと考えるのである。

しかし実際に思想運動としてほとんど展開することがなかったのは、韓愈の「師説」[10]や柳宗元の「答韋中立論師道書」[11]で述べられているように、当時有識者の間で師弟関係が形成されることがほとんどなかったため、「原道」が成立する背景となった韓門という思想を育む場が拡大してゆかなかったことによるのではなかろうか。

また宋学が仏教思想を採り入れ消化させて花開くことと比較して考えるなら、釈老を排斥しひたすら儒教の純化を追求した韓愈の姿勢は、時代の要求に答えるものではなかったとも思われるのである。

注

（1）例えば『朱子語類』巻百三十七・『二程全書』巻一～二などに見える。

（2）羅聯添氏『韓愈研究』の韓愈年表では、韓愈が三十一歳の書簡とする。

（3）羅氏の韓愈年表では、「原道」は三十八歳の著作とする。

（4）「與馮宿論文書」に〈近李翺從僕學文……（中略）……有張籍者、年長於翺、而亦學於僕、其文與翺相上下〉とある。

（5）羅氏『韓愈研究』『韓愈』に詳しい。羅氏は両者接近の要因として、①韓愈の長兄韓會と柳宗元の父柳鎮との間に交流があったこと、②韓愈と柳宗元の舅楊憑の弟楊凝とが、同時期に汴州の幕下に任を得ていたことなどを挙げておられる。

（6）「讀韓愈所著毛穎傳後題」に〈且世人笑之也、不以其俳乎。而俳又非聖人之所棄者。詩曰、善戲謔兮、不爲虐也。太史公書有滑稽列傳、皆取乎有益於世者也。……（中略）……且凡古今是非六藝百家、大細穿穴用而不遺者、毛穎之功也。韓子窮古書、好斯文、嘉穎之能盡其意、故奮而爲之傳、以發其鬱積、而學者得以勵、其有益於世歟〉とある。

（7）「與韓愈論史官書」に〈十八丈退之侍者、前獲書言史事云、具與劉秀才書、及今乃見書藁、私心甚不喜、與退之往年言史事甚大謬。若書中言、退之不宜一日在館下〉とある。

（8）「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士」に〈同官盡才俊、偏善柳與劉、或慮語言洩、傳之落冤讎、二子不宜爾、將疑斷還不〉とある。

（9）〈人物之所以蕃〉を〈人物の蕃なる所以〉と読んだ場合、「原性」で展開されている性三品説にかかわってくると考えられる。

（10）「師説」に〈嗟乎、師道之不傳也久矣、……（中略）……今之衆人、其下聖人也亦遠矣、而恥學於師〉とある。

（11）「答韋中立論師道書」に〈孟子稱、人之患在好爲人師。由魏晉氏以下、人益不事師。今之世、不聞有師、有輒譁笑之、以爲狂人〉とある。

（大学院学生）